Tamaburiburi-Web（http://www.nextftp.com/tmbb/）

《山田詠美》を国語教室へ

――山田詠美『蝉』の授業――

白瀬浩司

（初出誌＝『日文協・国語教育』第27号、日本文学協会国語教育部会、一九九五年十一月）

《山田詠美》を国語教室へ

――山田詠美『蝉』の授業――

白瀬浩司

一

田中実が、山田詠美の『風葬の教室』について論じ、その「排除のメカニズム」と題する章に次のごとく書き記したのは、一九九一年のことである。

『風葬の教室』の刺は教育の現場に突き刺さっているのではないか。これが論じられていることを聞かないが、とりわけ国語教育界はこれをどう受け止めているのかが気になる。[1]

私自身もかつて『風葬の教室』の授業に取り組んだことがあるが、[2]この田中の言に応ずるかたちで現場における授業実践をいちはやく呈示したのは、成安女子高校の深谷純一であった。[3]このほか、大阪南高校における梨木昭平の授業実践も明記しておかねばなるまい。[4]さらに、彼女の他の作品を扱ったものとして、和光高校の松本議生による『ジェシーの背骨』の授業実践[5]や、大谷高校の木村好宏による『ぼくは勉強ができない』の授業実践[6]などがある。

ただし、これらは、すべて自主教材としての取り組みであり、山田詠美の作品が国語教育現場における市民権を広く獲得しているとは決して言い難い。既に周知ではあろうが、実際のところ、彼女の短篇小説のいくつかは高等学校国語教科書の収載候補となりながら、いずれも最終的に不採用とされてきた。

例えば、その中の一篇に『晩年の子供』という短篇がある。この小説は、主人公（私）が十歳の頃を回想するかたちで描かれており、梗概は次のようになっている。

伯母の家の飼い犬に噛まれた主人公は、少年忍者が狂犬病に犯されて六ヶ月後に死ぬという「テレビの続き漫画」をみて、自分も同じ運命を迎えることを確信する。自分の死を意識したとき、彼女は、それまで気づかなかった季節や時間の移ろいや細やかな家族の愛情などをはじめて自覚し、クラスの「おしゃまさん」としてふるまってきた自身の虚偽性や残酷性をも捉え返していくことになる。

この作品が教科書収載の候補として検討された際、問題となったのは、

ⓐ　図書室で、手続きをせずに本を鞄に入れた。つまり、盗んだ。音楽室のピアノを勝手に開けて、白い鍵盤を絵具で染め上げた。　つまり、悪戯をした。男子便所で、立って、おしっこをしてみようと新しい方法に挑戦してみた。結果として、単に汚した。　私は、ありとあらゆる、それまでしたことのない未知の行動というものに、しばらくの間、自分を賭けた。けれど、長続きはしなかった。朝礼で、原因不明の惨事が取り上げられたからだ。　私は、もちろん、心の中で詫びていた。でも、仕方がない。私は、晩年を迎えて、常軌を逸していたのだもの。／私は、これを最後にしようと、ある日の夕方、理科準備室に忍び込んだ。　そこには、授業に使う、さまざまな石があった。石灰岩や凝灰岩や雲母、なんと水晶まで無造作に箱に放り込まれて、棚で息をひそめていた。（中略）その他のさまざまな石も取り出し、私は、順番に、それらを床に並べた。マグマの欠片もあった。名も知れない銀色の粉を隠し持ったすみに置けない石もあった。　水晶にいたっては、その角

ばった氷砂糖のような高貴な姿に興奮し、すんでのところで、口に入れてしまうところであった。石は、皆、死んでいた。そして、私は、それらを、心から愛した。／私は、鞄の中に、丁寧に、それらを入れた。眠りから覚めていない子供たちを扱うように、ひっそりと、鞄の奥深くに、私はそれらをしまい込んだ。そして、何くわぬ顔をして、理科準備室を出た。

という箇所であったという。これは、突然訪れた「晩年」に主人公が当惑し、残された僅かな時間に「心を使うことに多忙」で「訳が解らなくな」っている姿を描いた場面だが（やがて死の必然を感得した彼女は「平静」を獲得し、残された晩年を「明るい気持」で過ごす「決意」を心の中に抱くに至る）、ここに含まれる理科室で石を盗む件、学校のピアノの鍵盤にイタズラをする件、図書室から本を手続きをせずに持ち出す件の三カ所が検定審議会で「教材として不適切」ということになったらしい。具体的な論議の経過を詳細に知りえぬ私にとっては、《死の自覚と他者の生（死）に対する慈しみの発見》という全篇の主題に照らして細部を捉え返すことの放棄、あるいは主題から遊離した観点からの瑣末なあらさがしに堕してしまっているかにみえる。

今回、授業で取り上げた『蝉』についても同様のことが言える。『蝉』は右の表題作とともに短篇集『晩年の子供』（講談社、一九九一年十月）に収載されており、この小説もまた、主人公（岡田真実）の小学校四年生の頃の回想というかたちで書かれている。梗概は次の通りである。

ある夏の日の昼下がり、真実は目前で急死した蝉の腹を裂いてみた。やかましい鳴き声の正体を知りたい衝動にかられてのことである。はたして中は空洞であった。彼女は蝉の死骸を眺めながら、それが「憎しみの対象から、ただのはかない生き物として」感じられるようになる。同じ頃、母が弟を妊娠・出産し、愛情を一身に受けている弟に苛立ちを覚えた彼女は「あんたなんか死んじゃえばいいのに！」と罵声を浴びせてしまう。真実は目の前で泣き叫ぶ弟の姿に「蝉」を感じ、さらに叱られて母の胸で泣きじゃくる自分もまた空洞をおなかに抱えた「蝉」であ

ること――「私自身も同じ身の上であるということ」――に気付いていく。

この小説で問題とされたのは「セックスにまつわる内容表現」だった由、編集に関わった男女の「先生方」の間で「作品としては評価できるけれども、教室で自分が教えるとなると躊躇してしまう」という意見が大勢を占めたという。その該当箇所と思われるのは、

ⓑ「どうして、急に、お姉さんになるの？　どうして、お母さんのおなかに赤ちゃんが入り込んだんだろう。変なの？　お父さん、訳、知ってる？」／父は私の問いに面食らった様子で、しばらくの間、言葉を捜していました。／「お母さんのおなか、少しずつ大きくなって行ったけど、あれは赤ちゃんだったの？」（中略）「赤ちゃんが、段々、育っていたんだよ」／「へえ。赤ちゃんておなかん中で育つんだ。でも、どうして、お母さんのおなかを、すみかにしようと思いつくのかなあ。赤ちゃん、おなかの中にわいて来るのかなあ」／「ち、違うんだよ、真実、赤ちゃんの種があって、お母さんのおなかで芽を出したんだよ」／「へえ。誰が種まきしたの」／「そ、それは、お父さんに決まっているじゃないか」／「ふーん。お父さんの仕業だったのか」／父の顔は真っ赤になりました。今、思うと、まだ若い父を質問責めにしたのは可哀相だったと思うのですが、その時の私には、意地悪な気持がわいていました。漠然とですが、子供の出来る原因を追求するのは、父を窮地に落とし入れることだと、私は解っていました。

ⓒ「岡田んち、赤ちゃん、生まれんの？」／「そうだよ」／私が答えると、彼らは、どっと笑いました。／「へえーっ、岡田んちのお父ちゃんとお母ちゃんて、すけべだぞー」／「何それ」／「岡田、どうやったら、子供生まれるか知ってる？」

ⓓ「あんたは知ってるの？」／「えっ？　何がだよお」／「どうやったら、子供が生まれんのか知ってんの？」／「知ってるよ」／「誰に教えてもらったの？」／「松本がおもしろがって、皆に言ってたんだよ。兄ちゃん

の本を読んだって言ってたよ」（中略）「私にも教えてよ」／「やだ」／「教えないと、またぶつよ」／男の子は、渋々と、私の耳許に顔を寄せ、内緒話でもするように囁きました。誰が聞いているという訳でもないのに、彼は声をひそめるのでした。私たちは、それが、小声で話されるべきことであるのを、既に、悟っていたのでした。

ⓔ「おばちゃん、どうやったら子供が出来るか知ってる？」／「知ってるよ」／叔母は、さも、おかしそうに私を見ました。そして、こう付け加えたのです。／「すっごく楽しいことするんだよ。真実も、大人になったら解るよ。なあんてね、あはは」

といった部分のほかない。コンドーム等を用いての性教育の重要性すら取り沙汰される昨今、これが高等学校の国語教室で避けて通らねばならぬほどの「セックスにまつわる文章表現」なのだろうか。のみならず、一篇の完結した作品世界を検討の対象とする作業からは、これまた懸隔のある瑣末な論議だと言わざるをえまい（「作品としては評価できるけれども云々」の「先生方」に、この短篇のどのような点を「作品として」「評価」しておられるのか、ぜひ一度お聞きしてみたいものである）。

ともあれ、こうしてみると――どちらかと言えば、所謂「無難な作品」の部類に属する（と私には思われる）『晩年の子供』や『蝉』でさえ右のごとき次第であるから、『風葬の教室』もまた、単純に「長過ぎる」という理由か、あるいは「セックスにまつわる内容表現」という基準を適用されることになるのだろう――候補として推す声はあるものの、前掲の田中実の言に対する「国語教育界」からの回答が、「教育の現場に突き刺さ」る棘（山田詠美作品）の斯界への公的な（すなわち教科書における）登場をはばむという、まさに「排除のメカニズム」を作動させるかたちで示されていると言っても、あながち見当はずれではなさそうである。

二

ところで、高校の国語教室における読みの多様性なるものは、結果として所謂「指導書」のヴァリエーションの数（要するに、そこにどの学説が採用されているか）だけしか存在しておらず、その縮小再生産だけが繰り返されているのではないか。私は「指導書」の価値を決して否定するものではないが、しかし、それにしても、所謂「受験産業」の現場（塾で二年間、予備校で四年間）を経て学校現場に職を得た私にとって、「指導書」の言説を咀嚼すらせずそのまま教室で開陳し、「国語」を暗記科目たらしめている「教師」のかくも多いことは意外であった。そこに一種の制度として機能する「教科書」や「指導書」があり、「教科書」収載教材を（その適否の吟味もなく）無批判に使用し、教師が「指導書」の言説だけを拠り所に国語教室に臨むとき、教師や生徒の多様な読みや自由な読みは、却って抑圧されていくほかあるまい。また、何十年にもわたる所謂「定番」教材の存在は、教師の側に作品の読み深めや授業の洗練といったことよりもむしろ、授業のパターン化やマンネリ化をもたらすことになってはいないだろうか。

次に引くのは、この三月に卒業した生徒の一人が、高一の頃、『風葬の教室』の授業を終えた際に提出した感想文の一部である。

ぼくはこのような国語の授業がはじめてです。こんな楽しい小説が授業に出てくるとは思いませんでした。国語といえばどこか勉強というふんいきのある文章を読んでいって、それがテストに出るというパターンなのでぼくは嫌いでした。でもぼくはこの作品に非常に興味があったので熱中して読むことができました。

ここには、いつの頃からか「国語嫌い」になってしまった生徒たちが抱く「国語の授業」の固定的なイメージが

示されている。生徒たちに読む楽しさを味わってもらうこと、あるいは心揺さぶる衝撃的な作品との出会いを演出すること――シンプルだが、それが私たちの原点であり、責務でもあるはずだ。

だとすれば、入学してきた生徒たちと新たな国語教室を組織していくために、まず私たちがなすべきことは、彼らの中で固定化した「国語教室」のイメージを払拭していくことである。無論、それは一教材や一学期間のみで容易に果たせるものではないであろうし、だからこそ、たとえ大まかながらでも系統的な各学期（可能ならば年間）の授業計画あるいは授業テーマを設定した上で、教材選定や授業形態にも工夫を凝らしつつ、じっくり取り組んでいくほかあるまい。

ちなみに、私がチーフを務めた一九九四年度[7]の高一普通科・国語Ⅰ「現代文」の授業は、《「他者との関係性」と「個体（生命）の尊厳」の発見》ということを年間テーマに据え、次のような教材に取り組んでいる（教材の決定は学期ごとにおこなった）。ただし、年間テーマとはいっても、生徒たちに明示したものではなく、あくまでもこちらの心づもり程度のものに過ぎない。したがって、すべてをこのテーマへと還元するような授業展開は決してとっていないのだが、それでも二学期の授業を終える頃になると、漠然とではあれ、既習教材に通底するものを感得する生徒も出てくる。[8]

一学期【中間考査範囲】

丸山健二『マラソン・ランナーは孤独か』／◎山田詠美『蝉』（※初発・最終感想文各一篇）

【期末考査範囲】

芥川龍之介『羅生門』（※「続編」創作一篇）／野村雅一『身体像の近代化』

二学期【中間考査範囲】

◎鎌田敏夫『会いたい』（※感想文・歌物語創作各一篇）／日野啓三『私にとって都市も自然だ』

【期末考査範囲】

◎山田詠美『風葬の教室』（※登場人物評・感想文各一篇）

三学期【学年末考査範囲】

中村雄二郎『目に見える制度と見えない制度』／志賀直哉『城の崎にて』（※感想文一篇）

右のうち、◎印を付したのが自主教材[9]で、それ以外は使用教科書（第一学習社『新訂国語（一）』現代文・表現編』）に収載された作品である。また、※印を付したのは、生徒たちに「書く」作業をそれぞれ括弧内の内容で課したものである（これらは各学期評定の一～二割を占める。なお、『風葬の教室』の感想文は冬期休暇明けの提出で、三学期の評定対象とした）。

山田詠美『蝉』が前掲の年間授業テーマに響き合うものを持っていることは言うまでもない。また、芥川龍之介『羅生門』が十代後半のいわば生徒たちとほぼ等身大の主人公を配しつつも、その一方で彼らの実感しえないような極限的社会状況を背景としているのに対し[10]、この小説の主人公はむしろ彼らよりも小さな存在であり、彼らがかつて経験したはずの小学校時代の夏休みや弟の誕生（あるいは兄弟姉妹の存在）といった身近な時間や出来事が背景となっている。したがって、当然ながら生徒たちの中に喚起される違和感は『羅生門』に到底およばぬものの、それとは別の意味で、主人公岡田真実の小学四年生らしからぬ過剰な自意識は、生徒たちの違和感の対象となるだろう（回想というかたちで書かれていることを考えれば、それは「大人になった今」の語り手の自意識であるとも言えようが……）。

主人公の自己肯定は、蝉をはじめクラスメイトや叔母、ひいては生まれたばかりの弟に対してすら「死んでしまえばいい」と感じてしまうような、いわば自分を苛立たせる他者を否定することによって支えられていた。やがて彼女は、蝉や弟のみならず自身もまた空洞をおなかに抱えた「ただのはかない生き物」であること、すなわち「私

自身も同じ身の上であるということ」を発見していく。作品のラストに織り込まれた「私こそ死んじゃえばいいのに」という自己否定の言葉は、彼女が他者を肯定しうる新たな自己の肯定――あるいは、感覚的・感情的な自己執着から、他者の存在とともに自己を対象化する論理的な自己認識――へと到ったことをも示している。

この主人公について「彼らよりも小さな存在」と先述したが、小四という外的な設定はさておき、彼女の内的情況は、私たちの眼前の生徒たちのそれと決して径庭のあるものではなく、むしろ響き合うものとしてあると言えるのではないだろうか。したがって、お題目的にまとめるならば、主人公が身近な時間や出来事の中で他者の生命のはかなさやそれと同列に存在する自己（の生命）を発見していく過程を追体験し、自己を対象化する契機とすること（さらには身近な他者との新たな関係を築いていくこと）――これを『蝉』の学習目標として呈示することができるだろう。

最後に、蛇足ながら付言しておこう。わが校の生徒たちの出身地は、京都・奈良・滋賀・大阪……と、比較的広範にわたる。それゆえに、当然ながら入学したばかりの彼らは、ほとんどが顔見知りであった地域の小・中学校とは異なる雰囲気の中で、新たに自己と他者との関係を築いていかねばならぬ状況に直面している。本教材に取り組んだのは、まさにそんな時期のことでもあった。

三

『蝉』の授業は全五時限の取り組みである。テキストには単行本『晩年の子供』収載本文を用いている。導入の段階で、この作品が教科書教材の候補にあげられながらも不採用となったこと、その一方で（次に取り組む教材である）芥川龍之介『羅生門』が私の高一時代から既に「定番」化していたことに触れて、範読による全文通読に入

っていった。ここでは、全文通読の後に生徒たちが提出した初発感想を取り上げ、続く第四章で『蝉』の授業のポイントとなる事柄について述べていくことにする。

彼らの初発感想は、全員のものを一覧できるようプリント化して、次時限のはじめに配布した（同じものを以下に掲出するが、いま生徒氏名は省略に従う。また、表記および表現はすべて原文のままである）。

【初発感想Ａ群】

(1) 何がいいたいのかよくわからなかったので、先生が教えにくいという意味がわかったような気がする。

(2) この話が小学校などで使われなかったのは、どうして弟ができたのか、そのでき方を生徒にきかれたくなかったからだと思う。

(3) 僕は、何故この作品がダメなのかわからなかった。別に教えられないものではないと思った。

(4) 僕は、この作品は教科書の候補になって、選ばれなかったけど、別に教えられない内容でもないような気がした。

(5) なぜこの小説が教科書にのせられなかったのかと、読みながら思っていた。

【初発感想Ｂ群】

(1) 僕がこの小説を読んで思ったことは、中途半ぱな終わり方をしていたなあと思ったことでした。

(2) 最後はもっとすごいことになって終わるんやと思ってたのに、けっこうふつうで終わったのでがっかりした。本当に殺すとかいろいろ……。

(3) 蝉と真実が物語を通してどういうふうに結びつくかが楽しみだったが意外とあっさり終わった。こういう授業も面白いと思った。

(4) 僕は最初「蝉」という題にとまどった。読んでみたら細かな心理描写が気に入った。読んでいるだけでその

人の心情がわかるいい作品だと思う。

(5)　作者の幼い頃の感覚と、出来事に対するショックが読み続けていてよく伝わってきた。小学四年生の女の子にしてはこわいことを考えるなあと思った。

【初発感想C群】

(1)　ぼくは蝉を読んで、もし人に子供ができるのはなぜかと聞かれたら困る。ぼくはきっと答えられないと思う。

(2)　真実の友達はませていると思う。僕は小学生の頃、結婚したら子供が出来ると思っていた。

(3)　僕は男だからよく解らないけど、女の子がああいうことを知ったらショックを受けることは解った気がする。

この作品の教材としての適否について述べたものの中には、感想A－(1)・(2)のごとく私の説明を誤解しているものもあったが、概ね感想A－(3)・(4)・(5)といったところに落ち着くと思われる。感想B－(1)・(2)・(3)や感想B－(4)・(5)は、この作品の特徴についてそれぞれ別の観点から伝えていよう。また、感想A－(2)と感想C－(1)・(2)・(3)は、例の「セックスにまつわる内容表現」に関わる言及である。

ところで、表題が端的に示すように、この作品においては「蝉」が全篇の主題にからむ重要な要素となっている。次にあげる感想D－(1)・(2)・(3)・(4)・(5)は、この作品の中で「蝉」と対比（あるいは類比）されている対象について言及したものである。

【初発感想D群】

(1)　死というものがやけに身近に感じれた。この文章では人間と蝉が同じように書かれていた。あまりわからなかった。

(2)　蝉のおなかと母のおなかを対比してる難しい作品だと思う。

(3)　蝉のおなかと私の空虚な気持ちを対比させてることを感じた。

(4) 蝉という虫が、弟としてや自分としてなど、様々なものにたとえられてあり、夏になればふつうに見られる虫に、よくあれほど様々なことがおりこめるなあと思いました。

(5) 蝉のおなかの空洞と人の頭の中がいっしょに思えた。それは、両方とも中にどんなものがつまっているかわからないからだ。

このほか、主人公（岡田真実）に対する共感、あるいは違和感や反撥を書き記した初発感想は以下にあげる通りである。中でも、とりわけ多かったのは主人公が弟に対して抱いた感情に触れたものであった。おそらく彼らにとっては比較的身近で実感しやすい事柄だったからであろうが、それでもなお、同じ弟（あるいは妹）を持つ身でさえ、感想E－(1)・(2)・(3)と感想E－(9)・(10)とでは全く対照的な実感を語っているのが面白い。ついでながら付言しておくと、感想E－(4)・(5)・(6)は弟である身の弁、感想E－(7)・(8)は一人っ子の弁である。

【初発感想E群】

(1) こういうことが自分にもあったかもしれないと思う。僕にも五つ下の弟がいるし、小さいころ多分こういうこと思っただろうなあと思った。

(2) ぼくには二つ年下の弟がいて、何かしゃべってもむかつくこととかもあるから、真実の弟に対する気持ちがわかる。

(3) 僕は昔のことを思い出しました。それは弟に対するジェラシーです。夜ねるときによく泣いていたのを思い出しました。ちょっと暖かくなりました。

(4) ぼくは兄しかいないのでこういう経験がなかった。この話を読んで、ぼくに弟がいたなら多分こんなふうにぼくもなってたと思う。

(5) 自分の家もこの話と同じ姉弟構成なので、もしかしたら真実に似たようなことを姉が思っていたかもしれま

せん。

(6) ぼくは末っ子なので、真実のような気持ちになったことはないけど、こういう経験をしたことはいいことだと思った。

(7) 僕は自分に弟や妹がいないから真実の気持ちはわからないけど、もし自分が真実の立場なら同じようなことをしたと思う。

(8) 僕は一人っ子だからようわからんけど、やっぱり一番下の子供がかわいがられるのかなと思いました。

(9) ぼくはこの話を読んで弟が生まれたころのことを思い出しました。ぼくのときは真実みたいなことはぜんぜん思いませんでした。

(10) ぼくは一番上だが下に兄弟ができたとき、こうは思わなかった。真実をこういう気持ちにさせたのは、この親が悪かったのだと思った。

(11) この話を読んで思ったことは、親というものは二人子供がいたら二人とも同じようにかわいがってやらないといけない。

(12) 自分に弟や妹が出来て母親が下の子供ばかりかわいがるというのはよく聞く話だけど、親にしてみれば自分の子供は上の子や下の子も関係なくかわいいものだから真実も心配することはないと思う。

【初発感想F群】

(1) 確かに夏という季節はとても暑くうっとうしい季節だ。だれかを死ねばいいという気持ちに僕もなると思う。

(2) この真実の気持ちはよくわかる。あまりに暇で周りがうっとうしくなる。自分もたまにあるので結構おもしろかった。

(3) この話を読んだら自分にも似たようなことがだいぶん昔にあったような気がする。暑い日々、たいくつな毎

日、休みでもうれしくなくて毎日いらついた。気持ちがわかるので面白かった。

(4) 僕も、嫌なやつは死ねばいいと思ったことはあるけど、この話ではみんな死ねと思っているからよっぽどだと思う。

(5) 退屈も蝉がうるさいと感じたこともある。しかし、苛立ったくらいで「死んでしまえ」と思うとは恐ろしいと思った。

(6) 真実が弟に対して腹をたてる気持ちはよくわかる。しかし死んじゃえとまで思うのは少し異常だと思う。

(7) ふだんでも「死ね」という言葉をよく使ったりするけど、そう簡単に「死ね」という言葉を使うのはよくないということをこの話で思った。

【初発感想G群】

(1) まだ小さい子供なのに大人のような感じがする。ちびまるこちゃんを思い出した。そっくりだ。面白い物語だった。

(2) ぼくがこの話を読んで思ったことは、むちゃくちゃすごい小学四年生だなあと思った。ぼくが小学四年生の時には考えられないくらいにすごいと思った。

(3) ぼくが思ったのは、真実は神経質でいんけんだということです。小学四年生でそこまで思いつめるほどの頭があるわけがない。

(4) 蝉の音くらいでいらいらするのはよっぽど短気だと思う。よっぽどストレスがたまっていたに違いない。

(5) 僕がこの小説を読んで思ったことは、ここに出てくる女の子は神経質で、いろんなことを最後まで追求してしまう人だと思った。

(6) 主人公の真実が人をうらんだりするのが多いことに注目した。自己中心的な女の子だと思う。

(7)　この真実という女の子は、とてもわがままで、世界は自分中心に回っていると思うくらい、いやなやつだ。

感想G－(1)・(2)には、主人公の小学四年生らしからぬ自意識が感得されている。感想F－(1)・(2)・(3)に記された主人公の退屈や苛立ちへの共感は、感想F－(4)・(5)・(6)にも通底する。ただし、後者が共感を表明しつつも、主人公の反応の尋常でない点に触れていることは、授業の一つの足がかりとなるだろう。

四

主人公の尋常ならざる心情は、「思春期とも違う、反抗期とも言えないこの時期」において「必要なものを失った暑い空間に、放り出されて行き場を失ってい」たこと、すなわち《母親の不在》に起因するものである。のみならず、感想G－(3)・(4)・(5)・(6)・(7)が触れる主人公の人物形象に絡めて言うならば、彼女の感じた「退屈」や「孤独」もまた、

ⓕ　私のまわりでは、もう色々な人が死んでしまいました。私は孤独でした。それなのに、孤独を感じる張本人である自分自身を殺したいとは思いもよらないのでした。なんという自分勝手な子供だったのでしょう。私は、ただ周囲を憎んでいました。

という、彼女自身の「自分勝手」によってもたらされた側面を有している（ここには、自己のみの肯定と他者の否定がある。他者の存在を肯定していない以上、「孤独」は必然である）。

これらを踏まえたならば、やがて主人公の内面の変転していくさまを読み取ることが、次の作業となる。変転の最初の契機は、主人公の眼前における蝉の突然の死であった。自分を苛立たせる鳴き声の原因を知りたい衝動にかられた彼女は蝉の死骸の腹を裂いてみた。

ⓖ　あの鳴き声の正体は、いったい何だったのでしょう。私は、もっと、体の中に、いやらしいものが沢山詰っているのではないかと予想していたのでした。あのおなかの中には声だけが詰っていたというのでしょうか。あんなにも、私を苛立たせた原因は、ただの空虚だったというのでしょうか。私に殺意さえ抱かせたあのやかましさには実体がなかったのでしょうか。／私は、足許に落ちた蝉の死骸を見詰めました。すると、突然、それは、憎しみの対象から、ただのはかない生き物として、私の目に映りました。

ⓗ　突然、死んでしまう蝉たちのことを思うと、もう憎む気にはなりませんでした。それと同時に、昨日、心の中で殺してしまった人たちにも、憎しみを感じることがなくなりました。私の肩からは、すっかり力が抜けてしまい、何故、あんなにも苛立っていたのかが、さっぱり思い出せない程でした。

主人公が、蝉のみならずクラスメイトや叔母にまで感じていた「憎しみ」や「苛立ち」は、ここでとりあえず払拭されることになる。「憎しみの対象から、ただのはかない生き物として、私の目に映」ったという蝉に対する認識は、「心の中で殺してしまった人たち」にも適用されている。

ただし、そこに存在する主人公の自意識の内実を看過してはならない。それはあくまでも優越する自己の下に他者を定位するものとしてあり、彼女の言葉はそのことを余さずに伝えていると言えよう。すなわち、「それは、ただのはかない生き物として、私の目に映りました」とは、《私が、それ（蝉・クラスメイト・叔母）を、ただのはかない生き物と見なした》ことと同義であり、それゆえ、このとき彼女の得た平静は「ただのはかない」他者の発見――すなわち、相手が「憎しみ」や「苛立ち」の対象たるに足らぬ、いわば俯瞰（ふかん）しうる存在であることの発見に裏打ちされていたのである。

変転の第二の契機となるのは、生まれたばかりの弟を母親が病院から連れて戻ったことであった。当初、主人公は弟を「人間というよりも、むしろ虫のように見」なしていたが、「私のことなど忘れたかのように弟に夢中」な

両親や「愛情を一身に受けている弟」の姿にやがて苛立ちを感じはじめる。母親は帰宅したものの、主人公にとって《母親の不在》は本質的に解消しておらず（「私は、ようやく母が戻って来たというのに、少しも幸せな気持になれませんでした」）、そこに自身と同列の（あるいは優位な）立場で母親の愛情を争う敵対者としての他者を見出した彼女は、「蝉の姿」を弟に重ね合わせていく（というよりもむしろ、何とか「蝉」を重ね合わせようとした、と捉えるべきかも知れない）。

ⓘ　弟は、私を見て、誇しげに笑いました。少なくとも、私には、そう見えました。生意気な奴。私は、そう思い、こらしめるために、弟の耳を引っ張りました。強く引っ張り過ぎたのでしょうか。弟は火の付いたように泣き出しました。私は、驚いて、弟を抱き上げて、あやそうとしました。母に叱られるのが恐しかったのです。（中略）弟は、それでも、泣き止もうとはせずに、声を張り上げ、絶叫しているという感じで泣き続けました。私は苛々して来ました。／「うるさいなあ!!」／私は、諦めて弟を下に降しました。その時、私は、すべてを呪ったあの日の午後を思い出しました。いけない、私は、自分で自分を落ち着かせようとしました。けれど、遅かったのです。私は、こう叫んでいました。／「あんたなんか死んじゃえばいいのに！」／いきなり、母が私の肩をつかみました。そして、私の下着を降すと、お尻を叩き始めました。

「母に叱られるのが恐しかった」のも、より劣勢に立つことを恐れる子供らしい打算、あるいは肯定されたい自己の欲求によるものであろう。お尻を叩かれている間も、彼女は「歯を食い縛」って涙をこらえ、「弟を見据えて」いた。しかしながら、やがて母親に抱き上げられた弟が「すぐに泣き止み笑い始め」るのを見たとき、とうとう彼女は「盛大に泣き始め」てしまう。

ⓙ「ごめんね。でも、真実がいけないのよ」／私は母の優しい言葉を耳にして、益々、泣きたい気持になりました。私は自分の心の中に何か暖かなものが、注がれて来るように感じました。その時、私は、自分こそが、お

なかを空っぽにして泣き続ける蝉であったことに気付いたのでした。空洞を満たしてもらいたいと願いつつ人間が泣くということを思い、私は、とてもせつない気持でいっぱいでした。私こそ死んじゃえばいいのに。私は甘い気分で、そう思いました。

既に主人公の中では、蝉とクラスメイトや叔母が同列の「ただのはかない生き物」として俯瞰されていたし、眼前で泣き続ける弟に対しても彼女はそう感じようと努めた。そんな彼女が、ここではじめて「私自身も同じ身の上であるということ」を発見したのである。

かくて彼女の辿ったのが、（既に本稿第二章でも述べたように）感覚的・感情的な自己執着から、他者の存在とともに自己を対象化しうる論理的な自己認識へと到る道筋でもあったことが確認されるはずである。

感想C‐(1)をこちらからの発問――「小四の女の子から、どうして赤ん坊ができるのかと尋ねられたら、君はどう答えるか？」――として教室に還元していくことも可能であろう。実際のところ、生徒たちからは迷答・珍答が続出したが、結局、本当のことを教えるのは恥ずかしくてできないというところに落ち着いた。そこでさらに、「では、なぜ（私たちは）恥ずかしいと思ってしまうのだろうか」という問いかけをおこなった上で、作品にたち返っていく。

具体的には、主人公にもたらされた《弟の誕生という事態》と彼女の《セックスに関わる問いかけ》に対する周囲の反応を、それぞれ主人公がどのように捉えているかを、まず、みておくことにする。

引用ⓑ・ⓒ・ⓓ・ⓔの箇所に開示されるごとく、主人公に赤ん坊の誕生を告げた父親は彼女からの問いかけに戸惑いを隠せなかったし、クラスメイトたちの反応は冷やかしや笑いをともなった興味本位のものであった。叔母も主人公の問いかけに対し、やはり笑いでもって応えている。クラスメイトたちが「おもしろがって」、おそらくは「内緒話でもするように」「声をひそめ」て語ったであろうセックスの問題を、主人公もまた「小声で話されるべ

きこと」として認識している。なぜならば、それは「すけべ」（引用ⓒ）で、「いやらしい」（引用ⓖ）行為だったからだ。また、だからこそ、自身の問いかけは「父を窮地に落とし入れること」たりえたし、心の内に「熱くて暗いもの」を感じていた彼女にとって、父親の「うきうきとした様子」や「照れ臭そう」な姿は「不気味」なものに映じ、先生の祝福の言葉は「不思議」なものとして響き、叔母の言葉（「すっごく楽しいことするんだよ」）は憎悪の対象となった。

ここで、次の作業となるのは、主人公のこうした認識が彼女の内面の変転とともに、どのように変わったのかを捉えることである。

ⓚ「よかったなあ。お姉さんになるんだなあ。先生が、そうだから良く解るけど、ひとりっ子はつまんないもんな。兄弟がいるって、いいことだぞ」／私は、姉になる実感など、まるでなかったので、黙って先生の話を聞いていました。誰もが、私に幸福がもたらされるような物言いをするのが不思議でした。私は、ただ退屈を持て余しているだけなのに。

① 男の子が私の耳許で囁いたことが本当なら、ずいぶんと変わっていると思いました。この赤ん坊が、そんなことの結果に、この世の中に生まれて来たのかと思うと、馬鹿馬鹿しい思いでいっぱいになりました。私自身も同じ身の上であるということを、その時、私は、すっかり忘れていたのです。

引用ⓚは学校で先生に祝福される場面、引用①は両親が家に連れ帰った弟に夢中になっている場面に織り込まれたものだ。したがって、ここには、まだ感覚的・感情的な自己執着の段階にある主人公の実感が開示されている。しかし同時に、論理的な自己認識へと到った後の彼女の「すけべ」で「いやらしい」行為に対する捉え返しの内実がそこに逆照射されてもいるのである。すなわち、それは、「赤ん坊が、そんなことの結果に、この世の中に生まれて来たのかと思うと、馬鹿馬鹿しい思いでいっぱいになりました」という言葉の対極にある認識であるほかない。

あくまでも蓋然性の問題となるが、他者の発見と自己の対象化を主人公がなしえたことを考え合わせるならば、右の「そんなこと」は、やがて、はかないがゆえにかけがえのない生命をかたちづくる行為として再認識されていくとみるべきであろう。のみならず、《弟の誕生という事態》によってもたらされる「姉になる実感」や「幸福」もまた、自己と他者との関係性の中で生成し、育まれるものとしてあることを確認しておきたいと思うのである。

五

ところで、私がはじめて《山田詠美》を国語教室へ持ち込んだのは、一九九二年度の高三普通科・必修選択「現代文(b)」（四単位）の授業である。

生徒たちは寝ているか騒いでいるかが常態の、火曜日に二時限連続、金曜日に二時限連続という時間割設定の中で、彼らを作品に向き合わせること自体が、残念ながらかなり困難な国語教室であった（しかも教科書のない単独科目ゆえ、私は独りで不断に教材を準備し続けなければならない。いまの私ならば、「教科書」や他の担当者との所謂「共通範囲」「共通問題」[11]に縛られることのないこのような授業枠は大歓迎である。しかしながら、その年の四月に赴任したばかりの私にとって、この授業枠は、教材選定や授業形態をも含むあらゆる面にわたり、むしろ悪戦苦闘を強いられるものとしてあった）。だが、それゆえに却って、彼らを惹きつけることのできた作品（教材）は、それなりに本物であると私は考えている。年間二十篇におよぶ取り組みの中で、生徒たちの関心を惹いた作品の数は必ずしも多くはなかったが、『風葬の教室』はその中の一篇となった。

私は《山田詠美》の所謂「愛読者」ではない。実際のところ、『風葬の教室』も『蝉』も、《私的な読書》においてではなく、《教材さがし》の過程で出会った作品なのである。しかしながら、幾度かの授業実践を通じて、少な

くとも、彼女の小説が持つ教材としての力――それはとりもなおさず、作品の力ということになるのかも知れないが――を、私は信じている。

注

① 田中実「フェティシズムの誕生――『風葬の教室』」（『解釈と鑑賞』第56巻第8号、至文堂、一九九一年八月）。
② 拙稿「山田詠美『風葬の教室』の授業をめぐって――高一国語・現代文――」（『研究紀要』第30号、一九九三年十二月）。
③ 深谷純一「『風葬の教室』（山田詠美）を授業で読む」（『日本文学』第42巻第4号、日本文学協会、一九九三年四月）。
④ 梨木昭平「大阪府高等学校国語研究会第一部会――《教材研究集会》報告資料」（一九九四年一月）、「フェミニズム文学批評の可能性(2)――女性作家・山田詠美『風葬の教室』の場合」（『月刊国語教育』第14巻第7号、東京法令出版、一九九四年八月）。
⑤ 松本議生「山田詠美著『ジェシーの背骨』」（『「ことば」をひらく 国語教室の現場から』、同時代社、一九九二年）。
⑥ 木村好宏「大阪府高等学校国語研究会第一部会――《戦後文学を読む》報告資料」（一九九四年十二月）。
⑦ ついでながら、一九九四年度の私の担当科目およびクラスは、次の通りである。
高一普通科・国語Ⅰ「現代文」（三単位）……四組（男子45名）・五組（男子44名）
高一普通科・国語Ⅰ「古典」（三単位）……七組（男子45名）・九組（男子44名）
高二普通科・必修選択「古典(a)」（四単位）……五・六・九組（男子43名）
⑧ 例えば、一学期に取り上げた『蝉』以外の教材の、年間授業テーマと響き合う点をクローズ・アップしてみよう。なお、本文の引用は、使用教科書（第一学習社『新訂国語（一）』現代文・表現編）による。
(A) 丸山健二『マラソン・ランナーは孤独か』は、表題そのものが問いかけとなっている。ともに走る仲間たち、沿道やゴール地点における大勢の見物人の声援、殺到するスポーツ記者、待ち受ける表彰台。いずれもマラソン・ランナーのために用意された「晴れがましさ」である。しかし、そこにみられる関係性は「見物人＝不健康人」と「その代受苦者としての選手＝超健康人」という図式で捉えられ、見物人たちの「声援」も「罵倒」に等しい「狂暴なまでの自己主張にすぎない」とする把握が示される。だとすれば、最終段落の「見物人は帰っていく。しかし、まだ大勢の徒労の使者たちはゴールをめざして走って

いる」というマラソン・ランナーたちの姿は、他者との晴れがましい関係性を求めるものとしてではなく、むしろ自己の中に存在する何らかの内発的な動機に支えられたものとして映じてくるはずである（それは、「自分の肉体が本当に自分のものとなっていく」こと、あるいは「肉体と精神との間に一線を画して生きることの無意味さ」を自覚する営為でもあった）。

(B) 芥川龍之介『羅生門』では、荒廃した羅生門の下で飢死をするか盗人になるかという二者択一の逡巡を繰り返していた下人が、楼上における老婆との出会いによって、結果的に後者の行動化を選んでいく。この最後の行動におよぶまでの下人の心理の推移――雨宿りをしていた折の逡巡、楼上の光景に当初抱いた「六分の恐怖と四分の好奇心」、また老婆に立ち向かう際の「あらゆる悪に対する反感」や彼女を制した「安らかな得意と満足」、さらに彼女の言葉を聞いた後の「失望」や「侮蔑」の念とともに再燃する「憎悪」、やがて生ずる「ある勇気」――を追っていくのが、おそらくはオーソドックスな授業展開であろう。ただし、下人にとっての他者（老婆）との出会いが、当座の「引はぎ」行為を正当化するためだけに用意された観を呈し、少なくとも真の意味で自己の捉え返しへと到っていないこと、すなわち、自己を排した表層的な他者への同化といった意味をしか有していないことに留意しておく必要があると思う。

(C) 野村雅一『身体像の近代化』は、明治初年の日本人の裸体習俗や身体行動の様式がやがて見られなくなっていくことから説き起こす。それは「風俗の変遷のありふれたひとこま」などでは決してなく、「公権力の民衆の身体への介入」によって果たされた「矯正」や「改造」の過程として把握されている。そして、公権力（明治政府）が企図したのは、いまだ「可視的な共同体」に「脈絡づけられている個人個人を公的な場に引き出すこと」、すなわち、近代国家（より具体的には、近代国家の軍隊）の成員として民衆を組織しなおすことであった。民衆の根強い「着衣への抵抗」を押し切って、他者（公権力）による個々の身体への介入が「日本人の身体の様態や意味に根本的な変化」をもたらしえたとき、それは外的な変化にとどまらず、同時に個々の内面の変化をも促していくことになる。

⑨ いま小説に限って言うならば、自主教材の選定に際して、私は次のような点に留意している。無論、不十分な基準であることは否めないが、とりあえず私の現段階として呈示しておくことにする。

(a) 生徒たちが楽しむことのできる作品、所謂「国語嫌い」の生徒をも巻き込んでいける作品であるかどうか（のみならず、教室で彼らと一緒に読むとき、私自身が楽しめる作品であるということも重要である）。

(b) その作品が、折々の国語教室の情況（クラスの成員たちが醸し出す雰囲気や集団としての成熟度、それまでに取り組んできた教材等々）を勘案して設定された学期ごと（可能ならば年間）の授業計画の一連の流れの中に、あるいは授業テーマや到達目標の中に、きちんと位置づけうるものであるかどうか。

(c)　前記(a)とも関連するが、教師もまた生徒たちとほぼ同じ地平に立ち、ともに作品の読みを紡ぎ出していくことのできる作品であるかどうか。端的に言えば、「教科書」への収載や既存の「指導書」のない作品であること。これは担当教師間で指導案作りを通じて教材論議を巻き起こしたいという、当該学年「現代文」チーフとして足掛け三年になる私のひそかな願いでもある。

⑩　実際のところ、生徒たちの提出した『羅生門』の初発感想をみると、「わからない」とするものがそれなりの数を占める。ただし、そう書き記しながら、彼らは『羅生門』の作品世界が持つ不気味な雰囲気やある種の違和感を捉えてもいた。拙稿「高一国語（現代文）の授業・『羅生門』の続編を書く」（『解釈』第39巻第10号、教育出版センター、一九九三年十月）。

⑪　教育解放研究会「共通問題」（『学校のことば　教師のことば』、東方出版、一九九四年）。

付記（読者のみなさんへ）

このたびは、私の授業実践をダウンロードしてお読みいただき、ありがとうございました。

私のホームページ《たまぶりぶり通信》では、「授業実践記録」（http://www.nextftp.com/tmbb/lessons/）に次のような授業実践を公開しています。ＷＥＢ版の閲覧とＰＤＦ版のダウンロード、いずれの形でもお読みいただけるようになっていますので、是非、ご利用ください。今後も少しずつ追加していく予定です。

《たまぶりぶり通信》ＷＥＢ版・ＰＤＦ版

- ■ 山田詠美『蝉』の授業
- ■ 現代の歌物語を書く
- ■ 鎌田敏夫『会いたい』を読む
- ■ 清水義範『トンネル』の授業
- ■ 鷺沢萠『ほおずきの花束』の授業

また、「生徒たちの《現実》と切り結ぶために」と題した全六篇のシリーズを《でじたる書房》にて販売しています。この一連の論考は、高校生たちの現実感覚や体験と響き合うような現代作家の作品（五篇）を自主教材として取り上げた授業実践あるいは授業指針について述べたものです。タイトルと扱った作品は次の通り。あわせてお読みいただければ幸いです。

《でじたる書房》ＰＤＦ版

- ■ 心の《皮むき》のために――山田詠美『賢者の皮むき』の授業――
- ■ 恋人という名の他者――岩川隆『有楽町心中』の授業――
- ■ 選択肢としての《生》――重松清『舞姫通信』の授業――
- ■ 《希望》の在処――村上龍『希望の国のエクソダス』の授業――
- ■ 新たな《現実》に向かって――鷺沢萠『卒業』の授業――